
使い魔になりました

灰音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

使い魔になりました

【Nコード】

N1428BA

【作者名】

灰音

【あらすじ】

突然異世界に飛ばされた。そこで、主人公はいきなり使い魔契約を交わしてしまう。そんな主人公がトラブルに巻き込まれる！？

鈍速更新

ぶろろぐ（前書き）

この作品は、ゼロの使い魔に似てますが、世界観は全く違うのでご了承ください

ぶるるる

俺、タチバナソラ橘 空は現在とても驚いている

なぜなら、いきなりどこか知らない場所に飛ばされた

その上、目の前に現れたのは、俺の最も大切に、もう逢うことの出来ない人だからだ

『あなたが、私の使い魔になってくれるの？』

久しぶりに聞いた、彼女の声

懐かしくて、それでいて、いつも耳にしていたそんな矛盾した感覚がする

『ああ。……………えっ！？』

無意識の内に肯定して、言葉の意味を理解して戸惑った

使い魔！？

その言葉に驚いていると彼女の顔が目の前にあった

後ろに下がろうとすると、彼女の手で抑えられた

そして、唇が触れるだけのキスをした

『契約完了。』

その言葉が聞こえた瞬間、頭に何かが叩き込まれるような衝撃と共に俺は気を失った

第1羽 目覚める力（前書き）

連日投稿

第1羽 目覚める力

目を覚ますと知らない部屋だった

家具を白で統一した、シンプルな部屋だ

『起きたね。』

声ができる方を見て驚く

『桜。』

もう逢えないはずの彼女の名前

それを呟いた

『あれ？私、名前いったかな？まあいいや。よろしくね。』

お互い知ってるはずなのに、あたかも今日初めて出会ったかのような、そんな言葉に戸惑う

『えっと、桜だよな？』

一応確認のため聞く

『ん？そつだよ。サクラ・クラリスだよ』

人違いか

『そつか。そうだよな。あいつが居るはずないもんな。ハハハ』

だって、あいつはもう死んだんだからな

『どうしたの?』

同じ姿で同じ声に、同じ口調

ただの偶然だろ

『いや、何でもない。』

『そう? まあいいや。ところで、名前なんて言うの?』

『ん? ああ、言ってなかったな。俺は、橘 空だ。ところで、ここはどこだ?』

『ここは、私の部屋だよ』

『そうじゃなくて、ああ、なんて言うかな。』

『そんな事より、朝ご飯食べに行く。話はそこでゆっくりしよ』

『あ、ああ』

彼女は俺の手を取り引つ張るように歩き出した

俺達は今食堂にいる

食堂に着くまでに大まかな事は説明された

使い魔契約に、魔法があること、使い魔契約は授業の一貫で今日は使い魔と組んだ模擬戦があることなどを

『じゃあ、俺はサクラをご主人様かマスターって呼んだ方がいいのか？』

『ん？別にいいよ。ソラはそのままでも、ソラは何の能力があるの？』

『の、能力？』

『使い魔契約は、主人を守る代わりに、魔力が能力が貰えるの。私の魔力は、減ってないから、何か能力を貰ったはず何だけど』

『能力ね。ん、何にも感じないな』

『そっか。じゃあ、模擬戦の時、ソラは下がっててね？危険だから』

『いや、それは無理だ。女の子に戦わせて、男の俺が戦わないなんて出来るわけないだろ』

『ソラは何の力もないんだよ？この世界じゃ、魔法が使えない人は

魔法が使える人に勝てない。それに、ソラは、……………死ぬかも知れないんだよ?』

涙目でそう言うサクラ

『死なねえよ。次は絶対にお前を守って見せるよ』

俺はそう言って、サクラの頭をくしゃくしゃに撫でる

『……………絶対だよ?』

『ああ』

『ところで、次はってどういうこと?』

『あ、ああ、まあ気にすんな。な?』

『むう、って、もうこんな時間!? ソラ、早く食べて!! 授業始まっちゃう!!』

『おう!!』

そして、模擬戦の行われる闘技場

闘技場はコロシアムのような円の中に四角いステージがあるような
感じた

『次、サクラ・クラリス対ディオラ・ベルガラス。両者ステージへ。』

教師らしき人がそう言う

『行こっか？』

『おう！！』

サクラの後ろを付いて行く

『お願いだから、無理だと思ったらステージから降りてね？』

『分かった』

さっきまで他の試合を見てたから魔法がどんな物かは理解してる

だからと言って、女の子1人残す気はない

まあこれを言うとダメとか言われそうだから、言わないがな

ステージに上がると、金髪で美形の男とその隣に3mはありそうな
岩の人形、多分ロックゴーレムがいた

『やあサクラ。例の件考えてくれたかな？』

『その話は何十回もお断りしたはずです』

『そうかい。じゃあ、こういうのはどうだい？この試合の勝者の意見を聞くと言うのは』

『分かりました。その代わり、私が勝った場合、もう二度と目の前現れないでください』

『もちろんだよ。君が勝った時はそうしよう。僕が勝った時は、君は僕の婚約者になって貰うよ。』

『えっと、話について行けないんだけど……………』

『ソラ、ごめん。この試合負けられなくなった』

苦虫を潰したような表情でそうサクラが言う

『分かった。全力で勝ちにいく』

『うん！！』

『では、サクラ・クラリス対ディオラ・ベルガラスの試合。試合開始！！』

『ソラ、ゴーレムお願い！！』

『了解！！』

ゴーレムに向かって走る

ゴーレムは殴りかかってくる

それを横に飛んで避ける

どうする！？

堅そうな体に殴ったり、蹴ったりしたところで意味はないだろう

とりあえず、時間稼ぎに避けまくるか

幸い、拳を振り下ろす速度以外は遅いからな

避けるだけならなんとかかな

『ファイヤー！！』

手のひらから火が放出されてディオラに向かう

『ロック！！』

ディオラは岩を飛ばし火を掻き消す

『ロックシュート』

続けざまに魔法を放つディオラ

『当たらないよ!!』

それを軽々と避けるサクラ

『避けて良かったのかい?』

その言葉で振り返ると、今避けた岩がソラに向かって飛んでいた

『ソラ!!』

『隙ありだよ。ロックバインド!!』

走ろうとしたところに、岩がサクラの脚を捕らえた

『ソーラー!!』

岩はソラに当たり、煙を濛々と上げる

『ソーラー!!』

声のする方を見ると岩が飛んできた

避ける暇もなく、せめて、顔を守ろうと左手を薙いで目を瞑った

何時までも衝撃が来ない事を疑問に思い、目を開けると赤い物が俺を守っていた

カチャン

そんな音と共に知識が溢れた

『緋色の翼、緋色の剣』

赤い物は翼でそこから、一振りの剣を取り出す

そして、ゴーレムに一気に近づき、蹴り飛ばし、ディオラに向かって飛ぶ

『な！？ロックシールド』

目の前に岩の壁が出来たがそれを剣で切り裂き、ディオラの首に剣を当てる

『チエックメイト』

『そ、そんな』

『勝者、サクラ・クラリス！！』

こうして、俺の初めての戦いは勝ちに終わった

第1羽 目覚める力（後書き）

ふいゝ書きたいとこまでかけた

でも、説明が足りないなあゝ

ってことで次回説明タイムなり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1428ba/>

使い魔になりました

2012年1月4日13時45分発行